

丸亀・多度津 京極家歴史さんぽ

(公社) 香川県観光協会

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1-10
TEL:087-832-3377 FAX:087-861-4151

うどん県旅ネット

検索



山北神社奉納京極侯参勤交代御船揃絵馬(部分) (香川県指定有形民俗文化財) 山北八幡神社所蔵



京極家ものがたり

讃岐国（現在の香川県）の中央部にあり、政治経済の中心地として繁栄を続けてきた「丸亀」。長寿のシンボル「亀」をいたたくこの地名は、城を築いた亀山に由来するという。江戸時代、「丸亀城」にて七代二百十余年間、この地を治めたのが丸亀京極家であった。

宇多天皇の流れをくみ、近江源氏佐々木氏につながる京極家は、鎌倉時代に佐々木氏信が京都の高辻京極に館を構え、「京極」と称したことに始まる。室町時代には、侍所の長である四職の一家として勢力を誇る。しかし、内紛が原因で失権。その後、再興を果たし江戸時代末まで続く大名家となったのは、京極丸亀藩初代藩主高和の祖父にあたる京極高次の功績による。



京極高和像 丸亀市立資料館所蔵

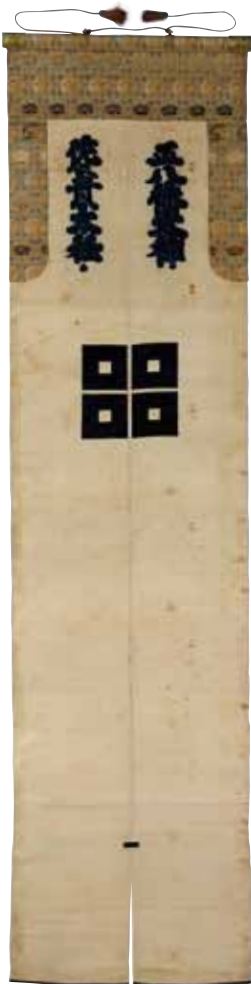
念願の入城

京極丸亀藩の歴史は、万治元年（一六五八年）に始まる。その年の二月、將軍家綱から丸亀六万六千七百七十石（離れた領地である播磨を含む）を与えるとの命が下り、京極高和は初代藩主となる。高和が城に入ったのは、同年五月五日。丸亀城で城主となった喜びをかみしめたに違いない。

高和の祖父にあたる高次は、信長の元で初陣を飾ったと伝わる。信長亡き後に秀吉と敵対するも、秀吉の側室となった妹（姉との説もある）の口添えにより罪を許され、秀吉の元で活躍し、大津六万石の城主となる。さらに、後の関ヶ原の戦いでは徳川方である東軍に味方し、京極家を存続させた。



四つ目結紋陣羽織 丸亀市立資料館所蔵



二尊旗 丸亀市立資料館所蔵
京極家が由緒ある家柄であることを示す「二尊旗」。室町時代の京極家当主高秀の時代のもので伝わる。「正八幡太神」「佐々貴太社」は後奈良天皇の筆による。

その子忠高は、出雲・隠岐二十六万余石もの藩主となり松江城に入ったが、後継者が定まらないまま急逝。そのため家名断絶の危機に陥る。しかし、由緒ある家柄や高次の功勞により、甥である高和が家督を相続し、大津と同じ龍野六万石の知行が許された。龍野藩主となった高和であったが、そこに城はなかった。城を持てぬまま二十年もの歳月が過ぎ、丸亀への転封により、高和はようやく城持ち大名となったのである。そして、丸亀城の改修を行い万治三年（一六六〇年）、天守を完成させる。

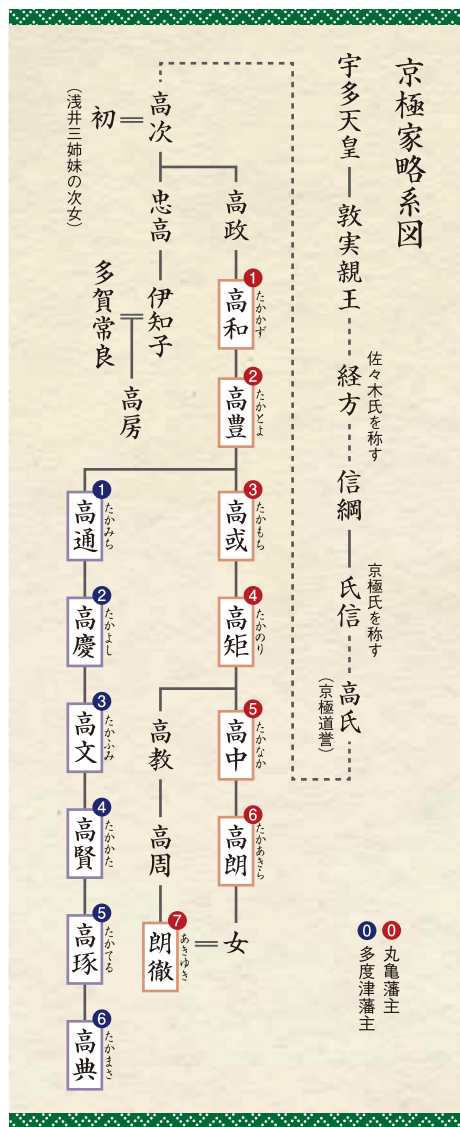
平和な時代の城づくりと初めての藩札

跡継ぎのない苦難を知る高和は、忠高の孫にあたる多賀頼母（後の高房）を養子とするが、その七年後に実子である百助が生まれる。この子が後の二代藩主高豊となる。高豊は、城

京極家略年表



一六五八	万治一	京極高和が丸亀藩初代藩主となり丸亀城に入る。
一六六〇	寛文二	丸亀城、天守が完成する。
一六六二	高文二	高豊、丸亀藩二代藩主となる。
一六七〇	貞享十	丸亀城の大手を北に移す。
一六八八	貞享五	下金倉村に中津別館（現在の中津万象園）を建てる。
一六九四	元禄七	高或、丸亀藩三代藩主となる。
一六九八	十一	一万石を分知し、多度津藩が誕生。高或が初代藩主となる。
一七〇五	宝永二	丸亀藩初めの藩札を発行する。
一七二四	享保九	高矩、丸亀藩四代藩主となる。
一七三三	宝暦二	高豊、多度津藩二代藩主となる。
一七五五	天明六	高文、多度津藩三代藩主となる。
一七六三	天明十	高中、丸亀藩五代藩主となる。
一七六九	天明十四	この頃、丸亀うちわの製造が始まる。
一七九四	寛政六	丸亀藩の藩校「正明館」を建てる。
一七九六	寛政八	高賢、多度津藩四代藩主となる。
一八〇六	文化三	丸亀に福島藩（港）が完成する。
一八〇七	文化四	多度津のお茶屋を建設する。
一八一七	文政八	高朗、丸亀藩六代藩主となる。
一八二五	文政十	丸亀藩が敬止堂を建てる。
一八二七	天保二	多度津陣屋がでる。
一八二九	天保四	高賢、多度津藩五代藩主となる。
一八三三	天保八	丸亀に新堀港が完成する。
一八三八	嘉永九	多度津に港が完成する。
一八五〇	嘉永三	朗徹、丸亀藩七代藩主となる。
一八五八	安政五	西讃府志が完成する。
一八五九	安政六	高典、多度津藩六代藩主となる。
一八六九	明治二	版籍奉還を上表する。
一八七一	明治四	多度津藩を廃し、倉敷県となる。
		朗徹が丸亀県知事となり、同時に多度津も丸亀県となる。
		十一月に香川県となる。



農民一揆と貯蓄米法

四代藩主高矩の時代には、丸亀藩では最大規模という寛延の一揆が起こる。また、高矩は俳人として知られ、庶民の間でも俳諧が盛んになった。諸国から有名な俳人も往来したという。



明倫扁額 城北小学校所蔵・丸亀市立資料館保管
(写真提供：香川県立ミュージアム)

五代高中の時代は、日本各地で大災害が相次ぎ、丸亀藩でも「備荒貯蓄米法」を定め、五年かけて三千俵を貯蔵した。また綿や甘蔗（サトウキビ）の作付けを奨励したり、塩づくりも行われていた。高中は教育にも熱心で、藩校「正明館」を建て、「明倫」の額を掲げる。

京極家略系図

宇多天皇——敦実親王——経方——信綱——氏信——高氏

丸亀藩主
多度津藩主



天保2年(1831年)に描かれた絵図から多度津の町並みや船の出入りの様子がわかる。手前右の松林付近に御殿があった。右奥が多度津港浦となるところ。
多度津町立資料館所蔵



多度津町立資料館裏庭には、藩主の御殿にあったという手水鉢が置かれている。その大きさに、小藩とはいえ御殿暮らしの豪壮さがしのばれる。
多度津町立資料館所蔵

京極家ごぼれ話

家紋「四つ目結紋」

丸亀京極家が公式な場面 で用いた家紋は「四つ目結紋」である。ご先祖である宇多源氏佐々木氏の家紋が「四つ目結紋」であったことから、京極氏の家紋に定まったとされる。また、その始まりは氏神の神図「四つ目結」に由来するといわれている。そして、多度津藩誕生後に、丸亀京極家の家紋は「平四つ目結紋」、分家の多度津京極家は「角立四つ目結紋」と区別された。

角立四つ目結紋

平四つ目結紋

四つ目結

多度津一万石

戦国時代の多度津は讃岐の守護代をつとめた香川氏の城下町であったが、秀吉の四国平定により滅び、一時は勢いを失っていた。そこに新たな繁栄の息吹を吹き込んだのが京極家である。

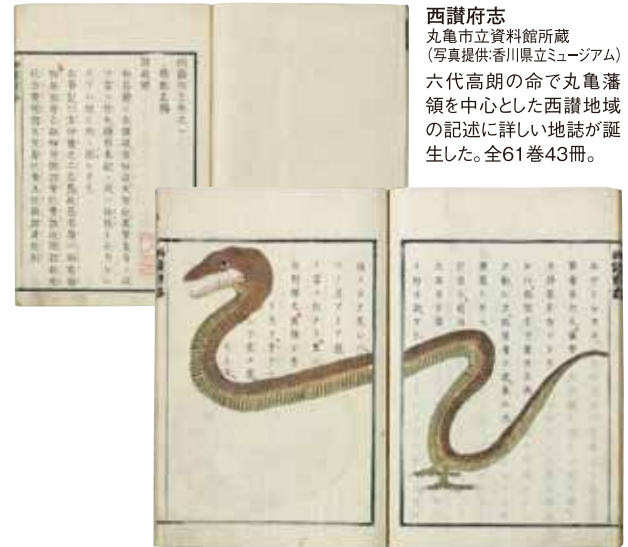
多度津藩初代藩主の京極高通は、丸亀藩二代藩主高豊の長子である。しかし、正室の子であった弟の高或が丸亀藩の三代藩主となり、

京極高朗像 複製 丸亀市立資料館所蔵
名君と慕われる高朗は、一般の人々も学べる「敬止堂」をつくり、丸亀をさるる繁栄に導く新堀港甫を築いた。



丸亀に眠る名君、知事となつた殿さま

四十年にわたり丸亀の治世に携わつた六代高朗は、十七歳で江戸から丸亀にお国入りすると、領内をつぶさに巡察した。その後、質素



西讃府志
丸亀市立資料館所蔵
(写真提供:香川県立ミュージアム)
六代高朗の命で丸亀藩領を中心とした西讃地域の記述に詳しい地誌が誕生した。全61巻43冊。

儉約を進める「勤儉の法」を定めた。さらに高朗は、新田の開拓や新たな港づくりといった基盤整備、うちわづくりなどの産業の奨励にも力を注ぎ、後に名君として讃えられる。また、領内の歴史や名跡などを克明に調べた「西讃府志」の編纂を命じ、二十年もの歳月を費やし完成させた。歴代藩主の中でただ一人、丸亀の地に眠る高朗は、今も丸亀市民にとって、身近に感じられる殿さまである。

京極家最後の殿さま朗徹は、丸亀城下の西屋敷で高朗のいとこの子として誕生した。幕末から明治維新という激動の波の中、禁門の変では、朝廷からの命で京都御所の警備にあたつた。明治二年(二八六九年)二月、版籍奉還を申し出て藩知事に就任する。その前年に起こつた鳥羽・伏見の戦いにより朝敵とされた高松藩を追討する明治新政府の連合軍に加わるが、一方で高松藩の赦免嘆願を仲介した。維新期の混乱の中で朗徹の心中はいかがであつたろうか。

讃州高松討伐応援差出旨請書案 丸亀市立資料館所蔵



山北神社奉納京極侯参勤交代御船揃絵馬 (香川県指定有形民俗文化財) 山北八幡神社所蔵
藩主が参勤交代で江戸から丸亀に帰ってきた様子を描いた絵馬。

人と町のよりどころ「丸亀城」

城づくりの変遷

丸亀城は慶長二年（一五九七年）、讃岐国十五万石の領主となった生駒親正、一正親子が城づくりに着手したことに始まる。慶長七年（一六〇二年）に一応の完成を見るも、元和元年（一六一五年）の一国一城令により廃城となる。生駒氏の転封後は讃岐の国が二分され、山崎氏が西讃岐五万三千石の藩主となり、領国の東端にある生駒氏の城跡に再び城を築く。幕府の許しを得て寛永二十年（一六四三年）より着工したが、二代藩主は治世わずか三年余で他界。続く幼い藩主も病死し絶家となり、城は未完のままであった。

そうした経過を経て、丸亀城に天守が完成するのは万治三年（一六六〇年）。丸亀六万六千七石の藩主となった京極高和により、丸亀城天守がそびえることとなった。

その後、二代高豊の時代には、大手を南から北に移すという改築が行われた。

二の門から登城

かつて丸亀城には、内堀の外側にもう一つ外堀があった。現在の県道のあたりである。藩政



二の門
二の門の左右に続く堀には、矢や鉄砲を撃つための小窓がある。丸亀城の狭間は開閉式で、全国的にも珍しい。



大手口
丸亀城の場合は最初にくぐるのが二の門であり、奥にあるのが一の門と呼ばれる。写真手前が二の門。



大手一の門（太鼓門）
重要文化財。楼上に時報用の太鼓を備えていたため太鼓門とも呼ばれている。

「九ツ時（正午）」の時太鼓を叩けます

丸亀うちわ「ニ」マスター
大林正春さん



【問い合わせ】うちわ工房「竹」
☎0877-25-3882（水曜日休）
※水曜日は城内観光案内所（☎0877-25-3881）へ



藩主玄関先御門
御殿表門と呼ばれる江戸時代初期の建築。



番所
出入りを監視した番所、御駕籠を置く部屋などが御殿表門に続く。



三の丸の石垣 扇の勾配と呼ばれる石垣の曲線美。石垣が二段三段に重なって見えるのもまた美しい。

時代には、この外堀を渡ることさえ簡単ではなかった。限られた人々しか入ることが許されなかったという堀の内から、当時の面影をたどりながら丸亀城に入ってみよう。

現在、残っているのは内堀のみ。北入口には最初に「大手二の門」がある。この両側の城壁には、三角や四角の窓が見える。もし、門の前に立った者が敵であれば、ここから矢や鉄砲の弾が容赦なく飛んできた。

二の門を入っても、そこには枳形と呼ばれる閉鎖空間が待つ。不審者であれば、三方からの攻撃にひとたまりもない。ときには、武者を勢ぞろいさせ、人数調べにも用いたという。

続いて「大手一の門」。太鼓門とも呼ばれ、この上で時報用の太鼓が叩かれていた。

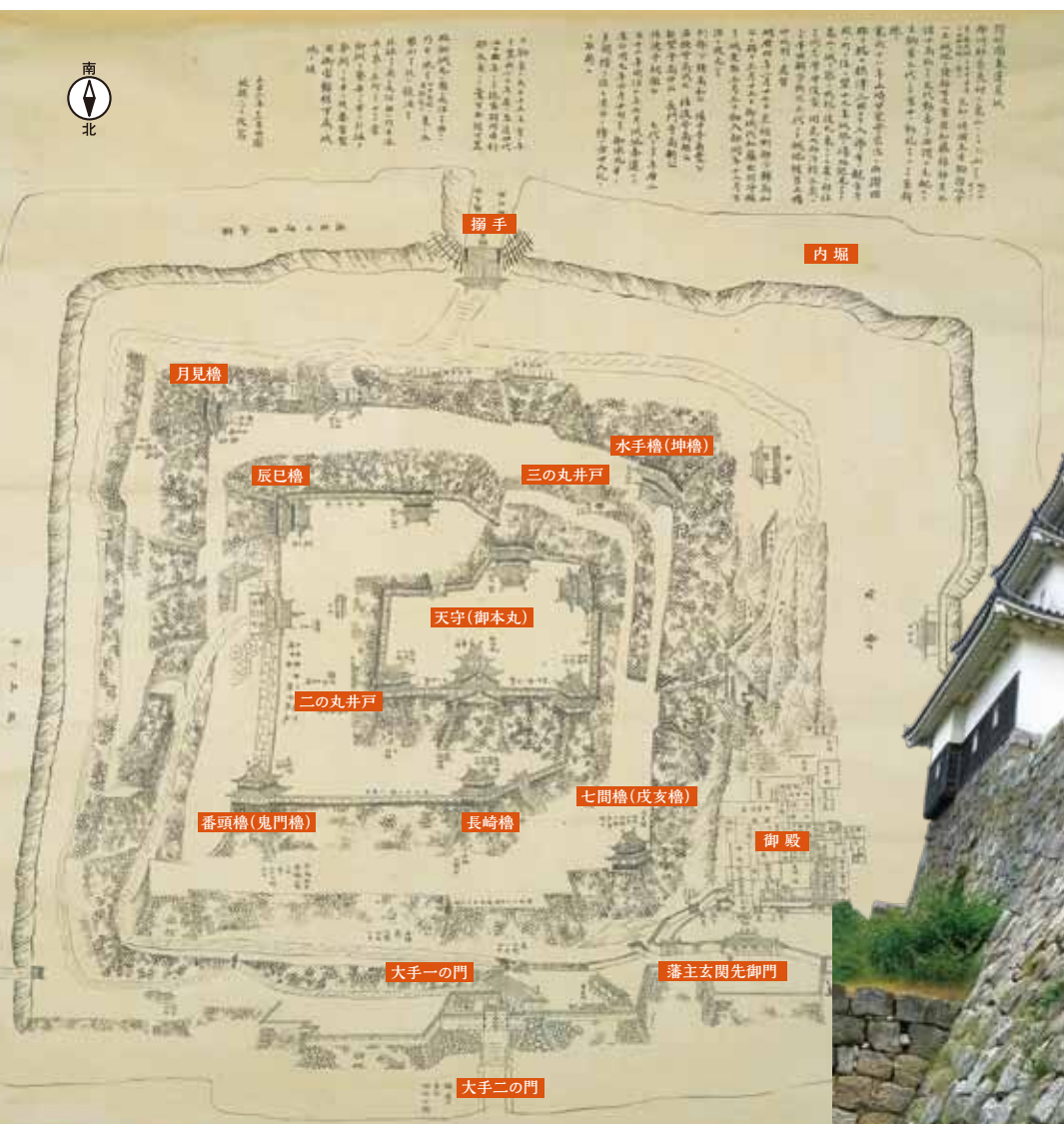
通常の登城であれば、大手口右手奥にある藩主玄関先御門へと向かう。そこには、番所があり、御殿への出入りを厳しく見張っていた。

その先にある御殿は、殿さまの住まいでもあり、藩政を執り行う場所でもあったのだ。

日本一の石垣

殿さまも普段はめったに登ることはなかったというが、ここからは天守を目指す。一の門から左に折れると、三の丸に向かう急勾配の坂がある。この坂の途中から見えてくる石垣は見事。

丸亀城の美しさは、まずは、この石垣の美にある。三の丸の石垣は高いところで二十二メートル、平地から本丸に至る高さは六十メートルを超える。山全体を石垣で囲む姿は壮観で、その美しさ



讃州丸亀蓬萊城図 丸亀市立資料館所蔵



A photograph of a traditional Japanese castle tower (tenshu) with white walls and a dark tiled roof, situated on a stone wall. The tower has multiple levels with small windows and a prominent roofline. It is surrounded by greenery and a stone wall.

二の丸を過ぎて、いよいよ本丸に至る。入り口には瓦葺きの門、塩櫓しおろう、宗門櫓しやうもんろう、多聞櫓たもんろう、姫櫓ひめなどが建ち、こども渡り櫓や土塀でつながれていた。そこにそびえる天守は、高さ約十五メートル三層三階。現存する全国十二城の木造天守のうち、最も小さく愛らしい天守である。

天守の内部には柱が林立し、一階は五十本、

二の丸を過ぎて、いよいよ本丸に至る。入り口

天守の内部には柱が林立し、一階は五十本、



A close-up photograph of a stone wall, showing the texture of the stones and a small plant growing from a crack.

A close-up photograph of a stone wall. The wall is constructed from irregular, dark grey stones. A prominent diagonal crack runs from the upper left towards the center of the frame. The background shows some green foliage.

は日本一との評判も高い。「扇の勾配」と呼ばれ、なだらかな曲線を描きながら上に向かい、次第に急勾配となり、最後には反り返るように天を突く。もちろん、城の守りをより強固なものとするためであったが、平和な時代には曲線美の石垣として名をはせることになった。城内では、石垣の多様な積み方が見える。また、出隅や入隅、刻印など、石垣巡りは多彩に楽しめる。

坂道を登れば、三の丸に至る。ここには番所があり、隅には月見櫓や水手櫓、七間櫓があった。さらに登れば二の丸がある。番頭櫓、辰巳櫓、五番櫓、長崎櫓があり、それを渡り櫓がないでいた。

二の丸には、伝説の井戸もある。深さ約六十五メートルの日本一深い井戸ともいわれ、秘密を守るため、石垣を築いた羽坂重三郎を殺害したとの伝説が残る。



二の丸の井戸
石垣を簡単にのぼった羽坂重三郎が敵に通じるのを恐れ、井戸底の調査を命ぜられ、石を投げ入れ殺されたという伝説がある。

二階は三十六本、三階は十六本。急な階段は二階へ十七段、三階へ十五段。その階段を上るといよいよ最上階。南に讃岐平野、北に瀬戸内海を見渡せる。緑の風と海風の心地よさは、江戸時代も今も変わらない。

もう一度外から眺める天守。この天守には偉大に見せる工夫がある。

建築の常道をあえて無視し、入母屋破風いりもややばふかや唐破風からばふかが城下の方へ向くように建てられている。装飾の多い面を見えやすくすることにより城下から天守を見上げると、城はより立派に見える。丸亀城は、知恵の数々を積み上げて今も堂々とそびえている。

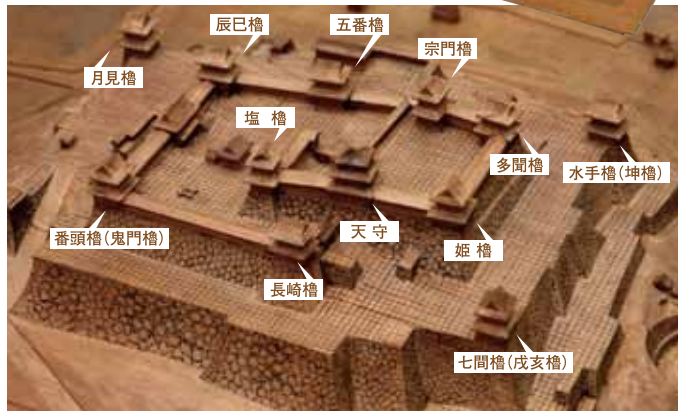
本丸を出て二の丸から北に下りると、七間櫓跡がある。明治時代に藩主の居宅が火災に

遭い、飛び火でこの櫓も燃え落ちた。火災を物語る変色した礎石が哀れ。そこから西に周り、山崎時代の大手であった搦手口からめてを目指す。途中には、抜け穴伝説が残る三の丸の井戸、江戸藩邸の一部を移築したという延寿閣別館えんじゅかくがある。山麓西側にはかつては馬場や浮島のある池十字架の形をした火打堀もあった。

資料館に向かう道沿いには、かぶと岩の威容を今も見ることが出来る。これは噴火口へ通り道にあつた火成岩の一部。岩石学上も貴重なものである。殿さまもあかずに眺めていたのだろうか。



五番櫓



京極家こぼれ話

城には城主の家紋「瓦」が使われる。もちろん丸亀城には、京極家の「四つ目結紋」が残されている。軒の門瓦などに見える「四つ目結紋」を探してみよう。



搦手口
山崎時代に大手口であったこともあり、通路は曲がりくねり、周囲には立派な石垣がそびえる。

丸亀城には現存する木造天守などの文化財の他、うちわづくり体験ができるうちわ工房「竹」や丸亀市立資料館がある。

丸亀市一番丁
☎0877-22-0331(丸亀市観光案内所)
[天守の開館時間]
9時～16時30分(入館は16時まで)
※年中無休(点検のため臨時休館あり)

城内で定期練習、お城まつりで
ご披露します

丸亀城鉄砲隊
山本陸雄さん

8

海辺の別邸

「中津万象園」

なかづばんしょうえん

丸亀藩二代藩主高豊は、城の西方に位置する金倉川下流の景勝の地、中津に貞享五年（二六八八年）、丸亀藩別邸の築庭を始める。北には瀬戸の島々、南には丸亀平野、空海ゆかりの五岳山まで見渡せるこの地は、「中津の別館」として歩み始める。



千代の傘松
近江のウツクシマツ（美し松）を300年の歳月をかけ傘型に仕立てたもの。樹齢600年余、直径15mにも達する。



「中津別館」は、白砂青松の浜に海水を引き入れた回遊式大名庭園であったという。現在の「中津万象園」でも、京極家ゆかりの近江の地にある琵琶湖をかたどった中央の池に、近江八景にちなんで帆、雁、雪、雨、鐘、晴嵐、月、夕映と名付けた八つの島が配されている。

中津御茶所

当時の大名庭園は、殿さまが個人的に楽しむためのものではなく、社交儀礼の場でもあり、茶席を催したこともあっただろう。そこで中津別館にも築庭当時から茶亭が建てられたと推測される。

京極家は代々風流を好む家柄で、中津別館をつくった高豊も茶の湯をたしなみ、野々村仁清に作陶を命じ、見事な茶器を所有していた。おそらく茶室にも目を見張るこだわりがあったことだろう。しかし、現存する資料は無く、高豊時代の茶室は今となつては幻である。

中津別館に茶室を確認できるのは、茶亭と母屋が現存する「中津御茶所」が建造された江戸時代後期。茶道を究めた者が多くいたという京極家。「中津御茶所」は、その象徴となる文化遺産である。

観潮楼

かんちょうろう

茶亭は、池にせり出し、茅葺の入母屋造、中二階の高床式建築。階段を上がり、貴人口を入ると、手すりの内側には二畳の控えの間と水屋。茶室は四畳半、西側に床があり、床柱は孟宗竹。天井は太鼓張りの一枚天井、北と東には栗材の手すりが付いた濡れ縁が回っている。茶室の三方は障子が開き、眼下に庭園が広がる。かつては丸亀城や讃岐富士、そして瀬戸内海を一望することができたに違いない。



観潮楼(右・上)
現在も中津万象園に建つ観潮楼。公開はしていないが、その姿を池の畔に見ることができる。



母屋
母屋は茶亭の東隣にあり、茶席の客の待合に使われていた。この庭に傘松を見ることができる。

この茶亭は「観潮楼」と呼ばれる。幕末から明治にかけて流行する煎茶文化、その初期の特徴を残す文化財として価値があり、現存する国内最古の煎茶席と言われている。「観潮楼」という名が示す通り、庭園の池には海水が流れ込んでいた。今でも、その一部には海水が流れ、海の魚が泳いでいる。

詩が生まれる庭

六代藩主高朗はことのほか庭を愛し、ここで幾つかの漢詩を詠んでいる。高朗が残した「琴峯詩集」に、その多くを見ることができる。今も多くの人の心に詩心を生む大名庭園。現在では「中津万象園」と呼ばれているが、万象園は森羅万象、即ち宇宙に存在するすべてのもの、それらを合わせ持つ名園という意味である。



琴峯詩集 丸亀市立資料館所蔵
六代高朗が19歳から36歳の時に作った作品から選んで編集された漢詩集。

中津莊即時（「琴峯詩集」六巻より）
曲々闌干枕ニ碧連一
樓頭對景聳吟肩一
破荷葉上蜻蜒立
折葦叢間鴻鴈眠
雲影過來帆影沒
松聲收盡水聲傳
畫圖至竟難ニ摸寫一
移在ニ先生詩句邊一

（口語訳）
曲がりくねった欄干が、碧色の波に映えている。高樓は景色の中で詩人の肩をいからせて誇示しているかのようだ。裂けた睡蓮にトンボがとまり、折れた葦の茂みで水鳥が休んでいる。雲が広がってきて帆影が見えなくなった。松をわたる風の音が止み、流水の音が響く。書や絵でもこの情景は写し難い。しばらくしてから先人の詩句を思い出した。

「ハレとケ」通信第21号
物語のある建築21より



母屋の扁額
この庭園を「万象園」と呼ぶようになったのは、明治以降に書の大家である野村素軒（そけん）が名付けたのがはじまり。現在母屋にかかっている扁額は、素軒の書を復元したものである。

中津万象園・丸亀美術館

現在の中津万象園には大名庭園にミレー、ルソー、コロドーなどの19世紀のフランス画を展示する絵画館、古代のオリエンタロマンあふれる陶器館などがある。
丸亀市中津町25-1 ☎0877-23-6326
【開園時間】9時30分～17時／年中無休

京極の宝

「京極に過ぎたるもの三つあり、につこり（ニツカリ）、茶壺に多賀越中」。

ちまたに流れたこの狂歌は、京極家の宝を表す。同時に六万石という小藩には過ぎたる宝を持つ名家であることも示していた。

につこり（ニツカリ）とは、京極家伝来の脇差。ニツカリ青江という印象的な名前を持ち、怪しい伝説が残る。

茶壺とは、野々村仁清の作品。当時の京極家では「色絵月梅図茶壺」「色絵牡丹図水指」「色絵釘隠」などを所有していた。

多賀越中というのは、近江時代からの重臣であり、丸亀藩では代々家老を務めた家系を指す。京極家は家老の知恵で度々窮地を救われた。

婆娑羅の血をひく

京極家を代表する人物の一人が、南北朝時代に活躍した京極道誉である。道誉は足利尊氏を助けて鎌倉幕府を倒し、室町幕府においても重職に就き大いに活躍したが、その権威にこだわらず、派手な衣装、自由な振る舞いで個性的な生き方を貫いた。茶・香・立花・能・連歌に秀で、室町文化を支えた文化人でもある。



桐四つ目結紋散鞘
糸巻太刀拵
丸亀市立資料館所蔵
総長96.7cm 総反り4.3cm。
江戸時代前期から中期の作と推定される。鞘（さや）は金梨子地（きんなしじ）に四つ目結紋と五三桐紋を交互に散らすなど、華麗なものである。

ニツカリ青江脇差（重要美術品）
丸亀市立資料館所蔵
南北朝時代の太刀を後に大磨上（おおすりあげ）して脇差にしたもの。「磨上げ」とは、刀身全体を短くすること。銘が完全に無くなるほど「磨上げ」のことを「大磨上げ」と呼ぶ。

その道誉を人々は「婆娑羅大名」と呼ぶ。「婆娑羅」とは当時の流行語、その語源はサンスクリット語の「vata」＝金剛石（ダイヤモンド）。全てのものを粉々に砕く金剛石のイメージが古い価値観を打ち砕くその生き方を思わせるのか。京極丸亀藩にも、道誉の「婆娑羅」気質は伝わる。代々藩主の美学へのこだわりはそれぞれ個性的で、常に新たな価値観を求めているようにも見える。

ニツカリ青江

享保十七年（一七三二年）のこと、老中を通じて将軍徳川吉宗の上意が高矩に伝えられた。京極家の侍烏帽子が他家と異なっていることに吉宗が興味を持ったのである。この烏帽子は先祖佐々木家から伝来のもの、京極家の古い家柄に興味を示す将軍に、高矩が上覧のために差し出したのは、後奈良天皇御宸筆「二尊旗」、佐々木高綱ゆかりの「轡直し之鐙」、佐々木信綱の「壺箆」、そして名刀「ニツカリ青江」などであった。

この「ニツカリ青江」は、備中青江の刀工貞次の作と伝えられ、もとは太刀であったものを後世に脇差に仕立て直した。慶長十九年



伝佐々木信綱所用壺箆
丸亀市立資料館所蔵
（写真提供：香川県立ミュージアム）



（二六十四年）、大坂冬の陣で、丸亀初代藩主の伯父にあたる京極忠高が、豊臣秀頼より拝領した。「ニツカリ」という名前は、「夜中につかり」と笑う女の幽霊を切り捨て、翌日にあたりを探すと、切り落とされた石塔が残っていた」という逸話による。

古くは佐々木家の重臣の持ち物であったとも伝わり、後に柴田勝家から子の勝久、そして丹羽長秀から子の長重に伝わり、豊臣秀吉に献上されたという。秀吉の死後、秀頼から忠高に贈られたものである。戦国時代ならではの運命をたどった「ニツカリ青江」であった。

仁清の茶壺

京極家の道具類の中でもひときわ華やかな名品が「仁清」の作品群である。それらの大半は京極高豊の命に応じて制作され、京極家に納められたという。「仁清」とは、京焼の流れである御室焼の名を高めた野々村仁清のこと。



野々村仁清「色絵月梅図茶壺」（重要文化財）
東京国立博物館所蔵 Image:TNM Image Archives

またはその作品を示すこともある。仁清は御室焼において色絵陶器を大成し、優美な茶具を完成させた。その轆轤の技は秀逸であったと伝えられる。

京極家道具帳

京極家が仁清の名器など、数々の家宝を有していたことは、「京極家道具帳」でうかがい知ることができる。「京極家道具帳」とは、延宝六年（一六七八年）から大正四年



京極家道具帳 丸亀市立資料館所蔵
（写真提供：香川県立ミュージアム）

（二九一五年）までに記された約五十冊の台帳で、京極家が所有する道具の数々が記載されている。「赤絵牡丹水指」や「御手焼藤模様御壺」などの仁清の焼物をはじめ、瀬戸・備前・信楽、中国や朝鮮のものまであり、絵画では雪舟や狩野派の掛軸や屏風、利休や織部の茶道具、蒔絵の漆器、香炉や刀剣類と名品の数々が記載され、京極家に伝わる文化の高さを物語る。

殿さまと相撲

京極家の歴代藩主は相撲好きであったと伝わるが、五代高中は特に愛好し、丸亀に帰国した折々に四度、相撲を上覧した記録が残されている。六代高朗も相撲に熱中しており、丸亀藩お抱えの力士が幕内にいつも五、六人いたという。江戸回向院の場所相撲で、高朗お抱えの力士が相手を投げたのを見て、手をたたき躍り上がった喜んだことが問題となり、大名にあるまじきこととして、それ以後は諸大名が回向院での相撲を見ることが禁止されたという。婆娑羅大名の子孫らしいエピソードである。



錦絵 丸亀象ヶ鼻平助
丸亀市立資料館所蔵
（写真提供：香川県立ミュージアム）



丸亀市立資料館
城内にあり、丸亀京極家ゆかりの歴史資料を中心に収蔵する。
丸亀市一番丁（城内） ☎0877-22-5366
【開館時間】9時30分～16時30分
【休館日】月曜日・祝日・年末年始

丸亀ご城下さんぽ

二代高豊の時代に大手を北に移し、丸亀藩のまちづくりは海に向かう。五代高申の時代に「福島湛甫」が、さらに六代高朗の時代には「新堀湛甫」が完成。丸亀大坂間に定期便の金毘羅船が往来し、丸亀は一層繁栄することになる。

その港から、往時の面影をたどりながらご城下散歩を楽しみたい。

港町の繁盛



太助灯籠
新堀湛甫の築造に併せ、天保9年(1838年)、塩原太助ほか江戸の町人が中心となり1380人余もの寄付により建てられた灯籠。



歌川広重「日本湊尽讃州丸亀」版画
丸亀市立資料館所蔵

筋の屋号を書いたのぼりが、それぞれの軒にはためいていた。上陸した乗客はまず船宿に入り、疲れを癒やしてから、陸路の旅支度をする。船宿は客船との契約により、大坂を出るときにすでに決まっていた。海岸に突き出た造りの茶屋もあり、うどん屋は三十八軒、仕出し屋は七十五軒もあった。

馬術の名手と禅宗の名僧

太助灯籠から丸亀城を正面に南に向かえば、「十三軒家古井戸」がある。海の近くでは、貴重な清水であった。金毘羅に向かう旅人も通った道筋の一つで、行き交う人々の喉も大いに潤したであろう。

城下町の北東部は寺町であり、ここにある



十三軒家古井戸



本行寺 佐臨大学の墓

娘仇討ちと与謝蕪村

あだう よさぶせん

「本行寺」や「寶津寺」の南は、かつては武家屋敷が並んだ風袋町。京極氏が譜代の家臣を置いたことから町がつくられ、その名前は譜代町に由来するという。この一角に住んでいたのが娘仇討ちで知られる尼崎里也。幼い頃に殺された父親の仇を討つため、十八歳になると江戸に旅立ち剣術を学んだ。奉公先を転々としながらついに敵を見つけ出し、江戸藩邸へ仇討ちを願ひ出る。これを聞いた三代高或は、武士の鑑として仇討ちの場所まで用意し、本懐を成し遂げた後は姫(高或の妹)の付き人として召し抱えた。風袋町や葭町の西は、米屋町や魚屋町などの商人まち。中でも通町は、ご城下の商業の中心地として栄えてきた。通町の西にある富屋町は、以前は兵庫町と呼ばれていたが、二代藩



与謝蕪村筆「紙本墨画蘇鉄図」 妙法寺所蔵



妙法寺に残された与謝蕪村の作品は重要文化財に指定されている(非公開)。境内には、小堀遠州が築いたといわれる庭があり、蕪村の絵のモデルになった蘇鉄も見える。



丸亀城郭及び城下町古地図
丸亀市立資料館所蔵
江戸時代後期の丸亀城郭と城下町の全容を示す古地図。享和2年(1802年)の年記あり。

※文化3年(1806年)に築かれた福島湛甫は、補筆されたと考えられる。新堀湛甫は天保4年(1833年)、太助灯籠は天保9年(1838年)に築かれており、この地図には記されていない。

京極家の菩提寺

富屋町の南西、南条町にある「玄要寺」(臨済宗)は、かつては南の農人町にまたがる広大な寺院であった。ここから北は寺町であり、今も多く多くの寺が残っている。玄要寺は、当初佐々木氏の菩提寺として、近江(滋賀県)の伊吹山下に建立され、高次が再興。京極家とともに、若狭の小浜、出雲の松江、播磨の龍野と移転し、丸亀へは万治元年(一六五八年)初代藩主高和に従って移った。丸亀歴代藩主でここに眠るのは六代高朗のみであるが、多度津京極家の墓や丸亀・多度津藩士の墓もあり、京極家の

菩提寺として、高次、忠高から六代藩主、多度津藩主、京極家一族の位牌が祀られている。



玄要寺 京極高朗墓所

ここにはまた、忠高の息女・伊知子の墓もある。二代高和の養子となった高房の母であり、亡夫への思いと子との別れの悲哀を綴った「涙草」の著者として知られている。養子となった高房は、高和に実子が生まれたことで、藩主になることはなかった。南条町はご城下のほぼ西端にあたり、かつての外堀を渡れば、この東から城内の侍屋敷であった。

亀山の南にある「山北」八幡神社

丸亀城の南には、生駒、山崎、京極の各藩主をはじめ、丸亀庶民の総氏神として崇敬を集めてきた山北八幡神社がある。亀山の南にありながら山北と呼ばれているが、もともと亀山の北にあった山北八幡宮を、生駒一正が当地に移したことから、寛永十九年(一六四二年)に山北村と命名したためである。境内には六代高朗の参勤交代の様子を描いた絵馬が奉納されている。

また、山北八幡神社の北西付近にはかつて「御野屋敷」と呼ばれる京極家の別邸があり、六代高朗はそこでの情景を詩に残している。

多度津陣屋まちさんぽ

桜川のほとりには、「旧たどつ藩お舟だまり」の石碑が立っている。その昔は、にぎやかに行き交う舟を見ることができた川端。ここから、今も「家中」と呼ばれる士族まちや金毘羅詣での人々にぎわった商人まちなちを訪ねてみる。

城のない大名屋敷

文政十年（一八二七年）、多度津藩四代高賢の時代、多度津に陣屋が設けられた。翌年から政務を執り始め、五月九日の九ツ時（正午頃）より時太鼓を打ち始めたという。陣屋とは城の築造が許されない大名の屋敷。天守や大規模な櫓などはないが、馬場や射場なども完備し、外郭、外門は三箇所設けられていた。

江戸末期の陣屋の図面を見ると、桜川に



お舟だまり跡



多度津町立資料館
旧多度津藩士であった浅見家から寄贈された敷地や建物を利用した風情あるたたずまい。
多度津町家中1-6 ☎0877-33-3343
[休館日] 毎週月曜日
(祝日の場合はその翌日)・年末年始
[開館時間] 9時～16時30分

沿って、藩米庫や武具庫が見える。藩のお舟だまり近くには、

剣術馬場があり、隣には藩校自明館、

そこから一軒あけて隣に、藩士の屋敷・浅見邸がある。ここは現在「多度津町立資料館」となっていて、館内には陣屋の模型もあり、当時の町並みを立体的に見ることもできる。

また、大蔵省が全て没収し焼却したはずの「藩札の版木」が展示されている。藩主は他県に先駆けて藩知事を返上し、東京へ引っ越しをするのだが、その際に遠州沖で遭難し、家財などを失ってしまった。そのため、政府は版木も無くなっただろうと思い、没収の手を緩めたので、ここに残されたのではないかと推測されている。

陣屋の東と西

浅見邸（資料館）を東に向かうと北に折れ曲がった路地がある。ここには厩があり、大手東門があった。厩跡の前は「武家屋敷富井家」である。京極丸亀藩に仕える以前のからの武士

多度津藩の藩札と版木
多度津町立資料館所蔵



多度津藩藩校「自明館」の瓦
多度津町立資料館所蔵
多度津藩の家紋「角立四つ目結紋」が入っている。



武家屋敷富井家
登録有形文化財である富井家は一般にも公開されており、予約をすれば、見学が可能。
(☎0877-33-1733)



富井家甲冑は、明治維新で朝敵となった高松藩を討つ目的で高松まで持参したもの。合戦にはならず箱に入ったまま持ち帰ったという。

で、京極家の家臣となつてからは富井氏と改名。文政十一年（一八二八年）に建てられた屋敷はもちろん、座敷に置かれた甲冑や刀剣、古書などが江戸時代の暮らしを物語る。

富井家の東には「天満神社」がある。まだ一帯が砂地の不毛の地であった時代からあり、京極家より春日灯籠一對が奉納されている。この天満宮西詰めを外部として大手筋と呼ばれる通りを中心に、鍵の手袋小路など敵の攻撃を遅くするための複雑な路地が設けられている。このあたりを「家中」と呼ぶ。これは多度津藩の御家中が住んでいたことから呼ばれるようになった侍の町。そのまま地名として残っている。御殿があったのは陣屋の西部、現在のJ R



天満神社



須賀金毘羅宮
境内にはかつての港に寄進された常夜灯が移築されている。



備前屋
備前屋の「傳五餅(でんごもち)」は人気の土産だった。



りという「神原薬局」など、歴史ある建物や店舗が今も立ち並ぶ。

江戸時代に北前船で財を成したことを礎に、明治・大正・昭和と活躍し、多度津七福神とも呼ばれた名家の一つ「合田邸」の屋敷もあり、広大な敷地や建物が、その財力の豊かさを物語っている。

また、東西の通り沿いにある「塩田邸」は、塩や米を入れる「吠」を扱っていた。西側に江戸時代の建物が残り、格子窓の刀傷は商家の繁盛に反感を持った武士が切りつけた跡と伝えられている。

陣屋から商人まちへ

桜川を挟んだ西側は商人の町である。江戸時代は金毘羅詣での人々などにぎわう商家が立ち並んでいた。それが、現在も残る本通りなどの商家である。

江戸時代から明治の中頃まで、餅やまんじゅうを商っていた「備前屋」や幕末まで鉄の原料問屋を営んでいた「てつや」、天保三年（一八三二年）に漢方問屋を開業したのが始ま

奥白方の家老屋敷

おくしらかた

ペリーの黒船来航など、開国を迫る外国と幕府の間に開戦の兆しが見え始めた幕

末。西洋列強に対抗するため、各藩も軍事力の近代化を進めた。北前船の寄港地として栄えた多度津藩は、小藩ながら情報収集には有利であったことだろう。他藩に先駆けて、洋式



備前焼 唐獅子雄(阿)像 多度津藩主より拝領



林求馬邸内座敷
邸内には大塩平八郎や頼山陽(らいさんよう)、伊藤東涯(とうがい)などの書や狩野派などの絵、また多度津藩主自筆の画軸や藩主から賜った備前焼の唐獅子など、貴重な文化財が収納されている。



林求馬邸玄関
玄関で迎える衝立(ついたて)。表面の「牡丹と孔雀」は、江戸後期の絵師、岡本秋暉(しゅうき)の作。裏面には松田蘇雪(そせつ)の筆による「笛吹貴紳と暴漢」が描かれている。

林求馬邸 多度津町奥白方荒698
☎0877-33-1005(林求馬邸)・0877-33-0700(多度津町教育委員会)
[公開日] 毎月第1日曜日(9時～15時)と毎年5月4日の良齋顕彰日に一般公開(無料)を行う。



街道と京極家

江戸時代、庶民でにぎわう金毘羅街道や藩主も通った伊予街道などが、丸亀藩や多度津藩の主な街道であった。その街道周辺に残る京極家ゆかりの場所を訪ねてみたい。

金毘羅参り

金毘羅参りは江戸時代の人々にとって、お伊勢参りや善光寺参りと並んで、一生に一度の願いであった。その港としてにぎわったのが、丸亀や多度津である。

丸亀の港は主に上方から東の船を受け入れたのに対し、多度津は西国、特に安芸(広島)からの船でにぎわっていた。

港に上がった旅人は、丸亀街道、多度津街道を通じて、それぞれ海の神様・金毘羅さんが鎮座する象頭山を目指す。一般的な金毘羅街道は、他にも高松、阿波、伊予・土佐街道とあったが、中でも丸亀街道は最もにぎわっていたという。

丸亀街道を行く

丸亀の商人たちは、港から金毘羅に向かう旅人のためにさまざまな店や市を開いていた。うちわなどを売る土産物店、小間物店、竹細工のいかき屋、魚の市、野菜の市、こう葉屋、も

金毘羅参詣名所図会
丸亀市立資料館所蔵
金毘羅街道の一つ「丸亀街道」は大いににぎわっていた。当時は案内絵図などが多く発行されていたという。



ちろん名物のせんべいやまんじゅうもあった。

港から、通町、

富屋町などの商店や露店を楽しみながら、南条町や農人町、餌差町などを通り、中府口からいよいよ金毘羅街道に入る。



中府には番所があった。その近くに今でも「金刀比羅宮」の額を掲げた石の大鳥居が立つ。左右には天明八年(一七八八年)と刻まれた一对の灯籠があったが、現在は福島のみなと公園に移設されている。この先からは三軒家と呼ばれるほど、さみしい場所であったという。それが、丸亀街道のにぎわいとともに人家が増えてきた。丸亀城の天守を左に仰ぎ見ながら、柞原から郡家へと進む。郡家にはかつての茶堂をしのぶ石碑が残されている。



中府の鳥居
金毘羅街道の「一の鳥居」といわれる。現在建っているのは、明治4年(1871年)に建立されたもの。

中府の丁石
金毘羅までは丁石が据えられていた。これを目印に3里(約12km)の道を行く。

多度津街道を行く

当時の多度津港は、桜川の河口、現在の金比羅橋から極楽橋にかけて入り江があった。湛甫が整えられてからは、ますます船の出入りが多くなり、廻船問屋が軒を連ね明治に至るまで港町は栄えた。

その船着き場上がった旅人たちは、金毘



料理屋や遊郭もあった西浜。当時のにぎわいをしのばせて、時が止まったような路地。

総本山善通寺

(善通寺市善通寺町 ☎0877-620111)

丸亀藩の善通寺に対する保護や支援は並々ならぬものがあつた。中でも丸亀藩三代藩主高或とその生母松寿院は深く帰依し、高或は善通寺の住職光胤と親交があり、本堂の再建を支援している。



総本山善通寺
四国霊場第75番札所。弘法大師の生誕地としても知られている。境内には、丸亀藩主が寄進した灯籠が残されている。



雲気神社

(善通寺市弘田町鬼塚)

宝暦四年(一七五四)、丸亀藩四代藩主高矩が再興し、自筆の額や鳥居、神図を寄進したと伝わる。祭祀についても、京極家において執り行われ、藩主の公式参拝があつた。伝説では、高矩が將軍の前で馬上から弓矢の腕前を披露することになり、夢枕に立った雲気の神の助言で大成功を収めたという。



雲気神社

善寿寺

(善通寺市善通寺町北原)

かつての三豊街道沿いにある善寿寺は、丸亀にある京極家の菩提寺「玄要寺」の隠居寺。丸亀藩の殿さまがこの前を通るときには、必ずかごを止めて降り立ち、お参りをしたとか。

永井清水

(善通寺市下吉田町)

かつては、ところてんの名所であったという「永井清水」。豊かな出水のほとりには、京極家の殿さまのために「永榎亭」と名付けられた俗に「お茶屋」と呼ばれる休憩所があつた。

江戸時代に藩のお触れなどを掲示した高札場。仁尾町に残る「辻の札場」は、丸亀藩の高札場であつた。棟の東西には京極家の家紋「四つ目結紋」の瓦が見える。その昔は、お触れなどを墨で書いた板が掛かっていたという。

隣には普門院があり、周辺は江戸時代の仁尾の中心地。藩主が領内巡視の折には立ち寄った場所である。文化十一年(一八四四年)、六代高朗の領内視察記録には「戸数千余り・豪買富人(裕福な商人)多きところなり」とあり、良港としてにぎわった仁尾の様子が伺える。

仁尾酢

(三豊市仁尾町仁尾丁)

☎0875-8228002

寛保元年(一七四一年)に初代中橋仁右衛門が丸亀藩の命により、「仁尾酢」をつくり始めたといわれる。仁尾は酢をはじめ、酒や醤油などの製造を藩に許可され醸造業が発展したが、現在営業が続いているのはこの仁尾酢だけである。



仁尾酢醸造蔵(中橋造酢株式会社)



辻の札場

京極家ゆかりの場所

塩屋御坊(本願寺塩屋別院)

(丸亀市塩屋町 ☎0877-223016)

塩屋御坊は、最初は教法寺といい、享保十六年(一七三一年)三代目住職の死去に際し、家族と門徒との間に争いが起こり、丸亀藩の指示で京都の本山へ伺ったところ、寺を召し上げられてしまふ。その後、教法寺を本山の別院とすることを藩が承認し、安永四年(一七七五年)には上棟式が行われ、広大壮麗な塩屋御坊(本願寺塩屋別院)が誕生する。



塩屋御坊



鶴橋
多度津の金毘羅街道の起点には「鶴橋」という橋が今も架かり、常夜灯や道しるべが、小さな橋のたもとに残されている。



一の鳥居
鶴橋にあった大鳥居は桃陵公園に移されている。鳥居は寛政6年(1794年)に建立され、寄進者の中には有名な力士「雷電為右衛門」などの名前がある。

名物今むかし

丸亀うちわ

江戸時代から今に続く丸亀の名産と言えば「うちわ」である。

その始まりは定かではないが、生駒氏の治世、金毘羅大権現の別当が天狗の葉うちわから着想し、渋うちわを作れば土産物になると考えていた。時を同じくして、丸亀の方でもうちわの本場、大和（現在の奈良県）から先駆者を招き、渋うちわを作り始めたとの言い伝えがある。

京極丸亀藩五代高中の時代である天明年間（七八一年～八九年）には、丸亀藩江戸屋敷と九州中津藩江戸屋敷との間で下級武士同士の行き来があり、うちわづくりを学んだという。



うちわ製作の様子

男竹平柄うちわ(右)と女竹丸柄うちわ(左)と女竹丸柄うちわ(左)男竹・女竹は竹の種類。また、持ち手が平たいものが『平柄』、丸いものが『丸柄』と呼ばれている。



金毘羅渋うちわ(男竹丸柄うちわ)渋を塗り耐水性が強く、土産物として、金毘羅の宣伝として作られたと伝わる。

六代高朗の時代には、製造は庶民の手にも移り改良も進み、金毘羅の参拝客によつて大いに需要も増した。七代朗徹の時代には、一時年産八十万本に達するほどになっていた。

江戸時代から続くこの「丸亀うちわ」の技は巧で、工程は四十七にものぼり、伝統的な技術と技法が評価され、国の伝統的工芸品に指定されている。丸亀のうちわ生産量は国内トップを誇り、全国シェアの九割を占める。

うちわの港ミュージアム(丸亀市港町三〇七二五)
☎0877・24・7055

江戸時代に丸亀で製作されたと思われる渋うちわをはじめ、丸亀うちわの歴史を伝えるさまざまなうちわを展示。また、実演コーナーや販売コーナーもあり、体験教室も開かれている。

〈開館時間〉9時30分～17時(入館は16時30分)
〈休館日〉月曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始

丸亀藩の三白

昔から讃岐の特産品は「讃岐三白」という言葉で表現されてきた。その三白とは、綿と砂糖と塩である(別の説では米・砂糖・塩)。

当時の丸亀藩の代表的な産物は「綿」であった。すでに元禄八年(二六九五年)に丸亀城下で夜間の綿打ちを禁止している。その音で眠れないほど、綿打ちが盛んに行われていたと推測される。その後の寛政時代(一七八九年～一八〇一年)には、以前より大量に木綿が大坂に送られていたと伝わり、文化四年(一八〇七年)ころには丸亀藩第一の特産品となっていた。

嘉永五年(二八五二年)には、城下の商人が「総糸」事業の開業申請を藩に願ひ出て、許可されている。「総糸」とは、一定の長さの糸を一定の枠に巻いて束ねたもの。藩内には総糸寄会所が設置され、ここに製品を集めて主に大坂市場に出荷した。これには、財政赤字に苦しむ藩も積極的に介入し、安政三年(一八五六年)には綿作農民に対し課税を行う。こうした綿づくりの伝統は現在も観音寺市の製綿業につながっている。

砂糖は、寛政年間(一七八九年～一八〇一年)に城下の塩屋村で甘蔗(サトウキビ)作りが始まり、多度津の白方、さらに西の吉津や麻、中姫の各村に広がった。安政四年(二八五七年)には砂糖も統制となり、丸亀城下や観音寺などにあった砂糖会所を通すようになったという。塩も一種の雑税である小物成として国を潤していた。京極時代になった万治元年(一六五八年)の記録では、運上塩二六八石一斗とある(一石はおよそ百五十キログラム、一斗は十五キ

献上品と特産品

丸亀藩では六月に干鯛、暑中に申海鼠、九月に鱈子、寒中には鯛を將軍家に献上していた。申海鼠とは、干した海鼠を串に刺したもの。藩内では海鼠の腸を抜いて煎り乾かした煎海鼠や干鮑、鱈子の製造を仁尾・姫浜・箕・伊吹島・飯屋・和田浜の各浦に命じている。

「西讃府志」など当時の資料によると、海鼠は庄内半島に多く、三野郡大浜の申海鼠が有名であったことが分かる。また、三野郡の楠浜は鯛や鱈の良い漁場でもあり、からすみも作られていた。

農産物に関しては、丸亀港で西瓜や大根の市が開かれていたことや、野菜や果物の種類が豊富であったことが資料から伺える。現在も丸亀の特産品として知られる桃も記されていて、当時は下高野(現在の三豊市豊中町下高野)で多く作られていたことが分かる。現在では丸亀市飯山町を中心にハウス桃から露地物まで上質な桃が育つ。

京極時代は思いをはせる味めぐり

實月堂の「丸亀お城もなか」

「六万石」や「うちわの町サブレ」など、丸亀ゆかりのお菓子で知られる老舗の「實月堂」。ここには、丸亀城をかたどった「丸亀お城もなか」がある。国の重要文化財である天守の形で、同封のあんこを絞り出して食べる。本店の他に丸亀城内観光案内所売店などで買い求めることができる。

實月堂
(丸亀市米屋町16)
☎0877-23-0300



丸亀市観光協会の「京極煎茶」

京極家が愛した煎茶を今の時代でも楽しもうと、丸亀市観光協会が開発した「京極煎茶」。丸亀藩の藩領であった三豊市の高瀬茶業組合などの協力により茶葉を選定し、おいしさと飲みやすさにこだわった逸品。丸亀城内の観光案内所や中津万象園売店などで手に入る。

丸亀城内観光案内所
☎0877-25-3881



大正堂のクッキー「たどつ湊北前船」

多度津の町歩きでも人気を博す大手筋の家並みの中にある菓子店「大正堂」。ロールケーキが有名な店で、カステラの生地で作ったクリームを巻いた「家中ロール」が人気。また江戸時代をしのばせるクッキーもおすすめ。かつて北前船の港として知られた多度津。クッキー「たどつ湊北前船」は、北前船がデザインされている。

大正堂
(多度津町家中2-35)
☎0877-33-2303



e・COCOCHI(良・こち)のお酒が香るスイーツ

多度津の古い町並みの中にある、築100年以上の古民家をリノベーションしたギャラリーカフェ(予約制)。メニューはドリンクと金毘羅さんの御神酒である金陵の大吟醸の酒粕を練り込んだ「多度津ロール」。予約にて販売もしている。

e・COCOCHI(多度津町西浜5-4) ☎0877-85-6038



丸亀城前のわらびもち

丸亀城大手門前の交差点に出ている「わらびもち」の屋台。奈良からわらび粉を取り寄せ、豆からひいたきな粉を使っているというだけあって、県外からも買いに来ると人気の味。

丸亀城大手門前、市民広場の角
開店は丸亀城桜まつりの頃から10月まで(月曜と雨の日は休み)・営業時間11時頃～16時頃まで



懐風亭の「茶茶御膳」

中津万象園にある、大名庭園を眺めながら食事ができる「懐風亭」。ここでは、歴代藩主が好んだお茶を料理に取り入れている。

お茶の効能を茶葉ごといただくことができるメニュー「茶茶御膳」は、季節ごとに素材を選び、工夫を凝らした内容が喜ばれている。

懐風亭(丸亀市中津町25-1) ☎0877-23-2266



A map of the area around Chitose Station. The JR Chitose Line (JR有明線) is shown as a black line with white dots, running diagonally from the bottom left towards the top right. Chitose Station (千歳駅) is marked with a white train icon. To the west of the station is the Chitose River (千歳川), shown as a blue wavy line. Further west is the Chitose Museum of Art (中津万象園・丸亀美術館), marked with a black dot. To the east of the station is the Chitose City Office (千歳市役所), marked with a black dot. The map also shows several streets, including Sakuragi Street (さくらぎ街道) and Sakuragi-cho (さくらぎ町). A blue hexagonal road sign with the number 21 is visible in the bottom right corner.

[illegible][illegible]